

Title	韓国語学習における学習成果の比較 : 韓国滞在経験者と未経験者の場合
Author(s)	金, 静子
Citation	大阪外国語大学学報. 64 p.185-p.199
Issue Date	1984-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80978
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

韓国語学習における学習成果の比較

——韓国滞在経験者と未経験者の場合——

金 静 子

Achievement in Learning Korean

——A Comparison between the Japanese Students
Who Have Been to Korea and Those Who Not——

目 次

はじめに

I 分析対象者の学習背景

- 1 共通の背景
- 2 滞在未経験組の背景
- 3 滞在経験組の背景
 - a 留学の形態
 - b 下 宿
 - c 友 人
 - d 新聞・雑誌類
 - e テレビ・ラジオ類
 - f その他の活動

II 学習結果（学期末テスト）の分析を通して見る滞在経験者と滞在未経験者の同異点

- 1 LLクラスの性格
 - a クラスの目的
 - b VTR の利用とその方法
 - c 時 間
- 2 テストに用いたテキスト
- 3 解答の形式
- 4 内容の理解度
- 5 答案に見られる顕著な誤用例
 - a 母音の例
 - b 子音の例
 - c 接続語尾の例
 - d 縮約形の例
 - e 尊敬語の例
 - f 接続詞の例

結 び

はじめに

1982年度の大阪外国語大学朝鮮語科4年生は総勢16名であった。そのうちの6名の者が3年次に大韓民国ソウルでの3ヶ月以上の滞在を経験した。その滞在期間中、正式に大学に登録し、単位を得て本学に持ち帰ったものと、語学研修コースに参加したものとがあった。

筆者が1982年度に担当したLLクラスはひとクラス12名で、そのうち5名が滞在経験者であった。この科目は選択科目であるため、履修しない者もあってこの構成となった。

このように、第3年次の一年間を、あるいはその一部分のかなりの期間を異なる言語(韓国語)環境で過した学生たちが、第4年次に入り、再び同じ場で授業を受けることになった。

滞在経験者は、学習上のどのような点でその成果を上げ得たのか、また未経験者とのどのような点で異なりを見せるのか。

このクラスは滞在経験者と未経験者が半々に近い割合を成す稀れな構成であった。

この論文は、このLLクラスにおける学年末テストの結果を分析することにより、2つのグループの理解の質の相違を種々の点から明らかにしようとするものである。

I 分析対象者の学習背景

1. 共通の背景

「はじめに」に述べたように、LLクラス構成者(分析対象者)は2つのグループに分けられる。すなわち、A:留学(滞在)経験組とB:留学未経験(滞在未経験)組である。この2グループは共に、1, 2年次においては共通の韓国語教育を受けている。3年次に至って留学する者と留学しないで本学3学年に進級したものとなり、A, Bのグループが生じた。

1, 2年次において、これらの分析対象者たちは、韓国語の実習科目として、週5コマ(=7.5時間)をもった。その内訳は、一年次が、文法:1, 会話:1, 講読:3の割合であり、2年次が作文:1, 会話:1, 講読:3であった。

1979年度 第1課程

課程	講座	授業科目	題 目		種別	毎週 時数	単位	備 考
講 義	語学	語学概論	朝 鮮 文 学 概 論	講義	2	4	1年必修	
		文学概論		〃	2	4	1・2年選択	
	文化	文化概論	現 代 朝 鮮 の 政 治	〃	2	4	来年度開講	
		〃		〃	2	4	1・2年必修	
第1課程・実習	語学	朝 鮮 語	講	読	実習	2	2	必修
		〃	講	読	〃	2	2	
		〃	講	読	〃	2	2	
		〃	文 法 ・ 作	文	〃	2	2	
		〃	会	話	〃	2	2	

1980年度 第2課程

課程	講座	授業科目	題 目	種別	毎週 時数	単位	備 考
講 義	語学	語学概論		講義	2	4	1年必修
		文学概論	朝鮮文学概論	〃	2	4	1・2年選択
	文化	文化概論	現代朝鮮の政治	〃	2	4	1・2年必修
		〃		〃	2	4	来年度開講
第2 課程・実習	語学	朝鮮語	講	読	2	2	必修
		〃	講	読	2	2	
		〃	作	文	2	2	
		〃	会	話	2	2	
		〃	講	読	2	2	
		〃	講	読	2	2	
							2単位 選択必修

2. 滞在未経験組の背景

3年次に至って、韓国語との接触量の相違が拡大する。Bグループは下にあげたカリキュラムに従うことになる。すなわち、1, 2年次では必須とされた実習科目がすべて必須の指定を取りはずされて選択科目となる。そのため韓国語との接触量が激減する者も出る。特に会話・LLといった生の韓国語への接触の機会である科目が選択となるからである。

1981年度 後期(第3・4課程)カリキュラム

後 期	講 義・演 習	語学	語学概論	朝鮮語学の諸問題	講義	2	4	⑩大学院
			〃	司訳院倭学書の言語	〃	2	4	
			文学史		〃	2	4	
			語学特殊研究	朝鮮語文法に関する諸問題	演習	2	4	
			〃	朝鮮語セミナーⅠ	〃	2	4	⑩大学院 3・4年 各1科目 選択必修
			〃	〃Ⅱ	〃	2	4	
		文化	文化特殊研究	朝鮮研究セミナー	〃	2	4	
			〃	朝鮮文化研究	〃	2	4	
	第3 課程・実習	語学	政治経済史		講義		4	集中講義
			語学特殊研究	文学セミナー	実習	2	4	3年 4年
			〃		〃	2	4	
			〃		〃	2	4	
		文化	文学特殊研究	現代小説講読	〃	2	4	⑩大学院
			文化特殊研究	朝鮮政治経済史研究	〃	2	4	
			〃	朝鮮政治研究	〃	2	4	
			〃	朝鮮の先史時代文化	〃	2	4	

3. 滞在経験組の背景

次にAグループの留学先における韓国語への接触量を推定する基礎となる生活環境を、把握で

きる範囲で客観化する。そのためにアンケート調査を行なった。当該の対象者が今年度（1983年3月）卒業し、すでに社会人となっている者がほとんどであるため、郵便によるアンケート用紙の配布・回収を基礎とし、アンケート用紙回収後、電話あるいは可能な者に対しては面接による細部参考事項の補充を行なった。

下表①はAグループに配布したアンケート用紙であり、②はその回答のまとめと参考事項である。

表①

姓名 _____

現住所 _____

韓国滞在期間 _____

滞在中住所 _____

留学大学／機関名 _____

下宿	同宿者数	日本語使用者	日本人	名	その他
		韓国語使用者	日本人	名	
	ルームメイト数	日本語使用者	日本人	名	
		韓国語使用者	日本人	名	
学校	予備科	授業使用言語・内容	日本語 韓国語 その他		
	本科				
	語学研修コース				
	その他				
活動	大サークル		使用言語		
	社会活動				
	アルバイト				
	その他				
友人		日本語使用者	日本人	名	その他
		韓国語使用者	日本人	名	その他
新聞	具体的に新聞名				
雑誌	月刊・週刊雑誌名				
TV	一週間に何日				
ラジオ	一日に何時間				
その他					

表②

a	留 学 の 形 態	1 年 間	3 名	国語・国文学
		3 ケ 月	2 名	語学研修
b	下 宿	3～4 名 (14名)		すべて韓国語使用
c	友 人	1～5 名 (多数)		大部分韓国語 (中に欧米人を含む) (日本語 (日本人))
d	新 聞 誌 類	0～3 種 0～3 種		主に大きな見出しの 拾い読み
e	テ レ ビ オ	30分～3 時間		主にニュース 他に連続ドラマ、ディスクジョッキー
f	そ の 他 の 動 活	日本語教師 教会		日本語使用 韓国語

a 留学の形態

表②に示されたように留学組に2つの形態がある。すなわち、大学本科に一年間留学した者(3名)と3ヶ月間語学研修コースに参加した者(2名)である。本科留学組をA-a、語学研修組をA-bと呼ぶなら、このa、bの間には韓国語接触量の差が大きい。A-bの者たちは、Bの残留組と同じカリキュラムを履修しながら、夏休暇の期間を利用してこの研修に参加した者である。この研修を主催するのは私立延世大学であって、研修機関として世界各国からの参加者を集め、そのカリキュラムの充実性と参加者たちの達成レベルの高さには定評がある。アンケートに記入された友人欄に欧米人(独逸人、米国人)があげられていたのはその事情を反映している。

語学研修コースの授業時間表

級 授業時間	1～6 級
9:00～ 9:30	語学実習
9:35～10:20	韓国語教本
10:25～11:10	韓国語教本
11:10～11:25	休息
11:25～12:10	講読
12:15～13:00	韓国語教本

A-aの3名はそれぞれ別の大学(すべて私立大)の国語・国文科におき、7～10科目を履習し、その単位を本学にもち帰った。10科目を履習した者は全体的に成績は芳ばしくなかったが(評価点B、Cが主)、他の2名は主にA、Bを得て良い成績を残したと言える。

A-aの3名が履修した主な科目は下記のようなものである。

国 語 学 概 論
国 語 音 韻 論

国 語 史

国 語 文 法 論

国 語 学 講 読

国 文 学 講 読

国 語 構 造 論

その他文学関係の科目が個人により多少するが履修されている。

b 下 宿

3～14名の同宿者をもつ。ほとんどの者が同宿者3～4名の小さな下宿屋である。14名と記した者は一家族が14名で、そのうち学生と同世代の者は1名であったという。またの下宿においても本人以外はすべて韓国人であり、常時韓国語を使用していた。下宿では朝夕食事を下宿人がいっしょに取り、今日何をするか？ どこへ行くか？ 今日はどうだったか？ 何をしたか？ 等々基本的な質問のやり取りが行なわれ、基本的な会話の準備とまとめが行なわれる機会がもたれる場である。

C 友 人

留学という環境にあっては友人は語学（会話）上達の要にある要素の一つである。気軽に忍耐強く話の相手をしてくれる（内容・表現の両面において）友人を得ることは困難なことではあるが、「ことば」の上達に関しては是非必要なことである。

アンケートによれば、5名それぞれに友人として韓国人をあげており、そのコミュニケーションにおける使用言語は韓国語だったという。

また同級生が同時に同じ町ソウルに滞在（7，8，9月の間は5名、その他の期間は3名）するのであり、何かにつけ同級生同士が連絡を取り合い集まることはなかったのか、という質問に対しては、あまり会う機会もたなかったという。

また友人とどんなことを主に話したかという質問に対しては、日常の必要事項に関してであり、日常生活において生じる困難や悩みに関しては「どうせ少々話したところで……」という気持ちが先に立ち、深いところまで話すことはなかったという。

d 新聞・雑誌類

新聞を読んでいたとした者3名で、他の2名はまったく読んでいない。新聞の読み方は主に「見出し」に目を通し、興味を引く記事を拾い読みするというものである。

雑誌に関しても新聞と同様で、新聞を読んでいた者3名が読んでいたと答えている。これは下宿先が購読していたものを読んでいたのであって、個人として特に滞在中購読したものではない。

雑誌は主に週刊誌であるが、中に月刊総合誌も少々含まれている。これらの読み方も新聞のそれと同様で、まず見出しを拾い読みし、特に興味を引くものを内容まで読み込むというものであった。

e テレビ・ラジオ類

全員がほとんど毎日テレビを見たと言っている。短い者で30分、長い者で3時間も見たというからかなりの量である。中には勉強しながら見たり聴いたりしている者もある。テレビで見るものは主にニュース類で、他に連続ドラマ等がある。ニュース類は徐々によく理解できるようになったが、連続ドラマ等はストーリーはなんとか追えるが、台詞の一つ一つははっきりとは理解できない部分が多かったという。

また、多くの者がラジオではディスクジョッキーをよく聴いたという。音楽の部分にほととずる時間をもつことができたからと学生自身が話していたことから考えて、韓国語のみの世界はやはりきつかったのだろうと推測できる。

f その他の活動

a～eまでにあげた項目は、誰であれごくありふれた日常生活のルーティンの中で必ずその環境の一部としてもつものである。この項目fはその他に特に学生自らがさらに異なる環境を求めて活動した分野を知るものである。学生5名全員がアルバイトとして「塾」において「日本語教師」をしたと報告している。この場合は「日本語」を教えたのであるから授業内外において気がねなく日本語を話したことになる。また、一名の者は教会とのかかわりを持ち、毎日曜日教会へ行き、その方面の人々と交ったといっている。

以上、第二章にその学習成果を分析する対象者の学習背景を述べてきた。ここに指摘した要因が果して学習成果の分析に当たってその核心を突くポイントであるかどうかに関しては、そう容易に答えることはできない。しかし、筆者自身、在日生活を経験し、その初期の日本語との接触の時期を顧る時、日常生活の生活環境そのものである要因a～fは重要な背景であったと考える。

II 学習結果（学期末テスト）の分析を通して見る滞在経験者と滞在未経験者の同異点

1. LL クラスの性格

a クラスの目的

一年間を通して①学生たちが「筆者の発話の全体を理解する」能力をつけること。②VTRを通して「見ながら聞き・理解する」能力をつけること。

b VTR の利用とその方法

使用したVTRは韓国のテレビ局が製作したものを直接収録したものである。内容はニュース、ドラマ、音楽舞蹈、マンガ、韓国現代社会、料理、日韓関係（歴史的なもの）など多岐にわたった。これらを短時間に切り、反復して見せ、その後難解な語（方言、俗語等を含む）を容易な語により、内容とともに解説した。

c 時 間

LLの時間は週1コマ、1コマ1.5時間、年間20コマで、計30時間のコースである。

2. テストに用いたテキスト

この分析に用いたテキストは2種類である。

A：簡単な手紙文

筆者がこの手紙文をゆっくり3度読みあげる。

B：短い VTR

VTR を3度見せる。内容は B(1) キャスターが報じるニュース（話のみ）。B(2) 映像を伴ったニュース。

3. 解答の形式

Aに対して

手紙の内容の要点のいくつかを問う。解答は自由作文で行われる。

Bに対して

報道内容の要点のいくつかを問う。解答は自由作文で行われる。

4. 内容理解度

テキスト A・B に対し、ともにその内容の理解に重点を置いた。その理解度を明らかにするため下表を作表した。この表において、内容の要点を項目化し、理解度を具体的に測った。

A：手紙

対 象 者 要 点	滞 在 経 験 者					滞 在 未 経 験 者				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
誰 が	○	○	○	○	○	△	△	○	○	×
誰 に	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
何 を	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
挨拶	○	×	△	○	○	○	×	○	×	×
中 心 内 容	ひでり	△	○	△	○	○	○	○	×	○
	思い出	○	○	×	○	○	×	○	○	×
	手続	○	○	×	○	○	×	×	×	○
	学校	○	○	○	○	○	×	○	○	×
見物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
日付	○	○	×	○	○	○	×	○	×	○
挨拶	×	○	○	×	○	○	×	×	×	○
正解率 % (内容把握率)	82	91	64	91	100	95	45	82	55	55
平均	86					66				

○印：正解
△印：不十分だが可
×印：無解答又は誤解答

B-(1) 電話

対 象 者 内 容 要 点	滞 在 経 験 者					滞 在 未 経 験 者				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
誰 が	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
い つ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△

どうした		○	○	○	○	△	×	○	○	○	×
誰に		○	○	○	○	○	×	○	○	○	○
何で		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
中心内容	1*	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	2	△	×	○	×	×	×	×	×	×	×
	3	○	○	○	○	×	○	×	○	○	×
	4	○	○	○	○	○	×	×	○	×	×
	5	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×
	6	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×
正解率 % (内容把握率)		77	73	82	73	59	36	45	64	55	32
平均		73					46				

B-(2) コスモス号の落下

対象者 内容要点	滞在経験者					滞在未経験者				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
1*	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
2	○	○	○	○	×	×	○	△	×	×
3	○	○	○	○	○	○	○	△	○	×
4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
正解率 % (内容把握率)	100	100	100	100	80	80	100	60	80	60
平均	96					76				

上記の3表より内容理解度に関して、次のことが指摘できる。

- ① 滞在経験者は未経験者に比して、全体としてより確実に内容を把握している。正解率(内容把握率)は平均で、Aは86%：66%、B-(1)は73%：46%、B-(2)は96%：76%である。
- ② ①は滞在経験者が聴いて、あるいは見て理解する力が未経験者より平均的に強いことを物語っている。すなわち、受動的な形式での理解度は滞在経験者が優れている。
- ③ 滞在未経験者の中にも内容把握がしっかりしている者も何人かいる。しかし話の内容や提示される形式により揺れがあって不安定である。
- ④ Aはやさしい内容の手紙文をゆっくりと3回読み上げたものである。B-(1)はキャストの報道のみで、その内容の映像を伴っていない。B-(2)はキャストの報道が映像とともに進むものである。ここから、AとB-(2)は理解されやすく、早い調子の映像を伴わない報道は滞在経験組・未経験組を問わず、相対的に内容把握率が低くなっている。

5. 答案に見られる顕著な誤用例

4. では内容の理解度を見たが、答案の形式が自由な作文によったため、作文中に種々の誤りが

見られた。それらの誤りのいくつかの顕著なものに関し2, 3言及する。

a 母音の誤用例

e-ε-ö-a-wε-je の混同と混用。これらの音のどれかを用いる場合、相互に誤用した例。

[手 紙]	滞 在 経 験 者					滞 在 未 経 験 者				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
正用数 使用数	$\frac{99}{100}$	$\frac{60}{60}$	$\frac{81}{86}$	$\frac{60}{63}$	$\frac{69}{70}$	$\frac{33}{33}$	$\frac{36}{38}$	$\frac{88}{90}$	$\frac{49}{50}$	$\frac{37}{37}$
平均使用数	76					50				
正用率(%)	99	100	94	95	99	100	99	98	98	100
平均正用率(%)	97					99				

[VTR]	滞 在 経 験 者					滞 在 未 経 験 者				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
正用数 使用数	$\frac{73}{70}$	$\frac{106}{110}$	$\frac{78}{80}$	$\frac{93}{96}$	$\frac{46}{47}$	$\frac{31}{31}$	$\frac{27}{30}$	$\frac{65}{65}$	$\frac{50}{53}$	$\frac{20}{21}$
平均使用数	81					40				
正用率(%)	100	96	98	97	98	100	90	100	94	95
平均正用率(%)	98					96				

b 子音の誤用

ここではŋ-n（終音：音節末音として）2つのいずれかを用いる場合、相互に誤用した例。

[手 紙]	滞 在 経 験 者					滞 在 未 経 験 者				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
正用数 使用数	$\frac{180}{184}$	$\frac{131}{131}$	$\frac{136}{140}$	$\frac{166}{167}$	$\frac{122}{124}$	$\frac{85}{85}$	$\frac{52}{53}$	$\frac{98}{99}$	$\frac{74}{77}$	$\frac{66}{69}$
平均使用数	149					77				
正用率(%)	98	100	97	99	98	100	98	99	96	96
平均正用率(%)	98					98				

[VTR]	滞 在 経 験 者					滞 在 未 経 験 者				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
正用数 使用数	$\frac{117}{117}$	$\frac{158}{162}$	$\frac{107}{111}$	$\frac{149}{150}$	$\frac{61}{62}$	$\frac{43}{43}$	$\frac{37}{37}$	$\frac{78}{78}$	$\frac{115}{117}$	$\frac{42}{42}$
平均使用数	120					63				
正用率(%)	100	98	96	99	98	100	100	100	98	100
平均正用率(%)	98					100				

c 接続語尾の誤用

ko と ㅏ/a/jɔ (so) 相互の誤用に関して.

[手紙]	滞 在 経 験 者					滞 在 未 経 験 者				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
正用数 使用数	17 25	14 17	17 24	20 25	11 13	9 10	6 7	14 18	12 18	6 6
平均使用数	21					12				
正用率(%)	68	82	71	80	85	90	86	78	67	100
平均正用率(%)	77					84				

[VTR]	滞 在 経 験 者					滞 在 未 経 験 者				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
正用数 使用数	9 16	23 28	13 17	20 29	10 10	4 4	3 4	11 14	8 15	2 2
平均使用数	20					8				
正用率(%)	38	82	76	69	100	100	75	79	53	100
平均正用率(%)	73					81				

上表から次の点が指摘できる.

- ① 滞在経験者は未経験者に比して, 平均的に約2倍の検証例を用いている.
- ② 正用率は滞在経験者と未経験者ではそれほど大きな差異はない. 正用率では未経験者の方が高い場合もいく例がある.
- ③ 検証例が母音と子音のとらえ方と接続語尾の使い方という3点であって, 限られた範囲のものではあるが, ①と②を総合すると, 滞在経験者の使用頻度の高さとその乱雑な使い方, 未経験者の使用頻度の低さとその使用における適確さが指摘される.
- ④ 4. でみた正解率(内容把握率)における滞在経験者の優位がここでは認められない. 解答の形式が自由作文——内容把握という受動的な行為ではなく, あくまでも能動的な表現行為における正用率では滞在経験者と未経験者とではほとんど差異がない. これは滞在経験者は約2倍の量の言語要素を用いて解答を出してはいるが正用される率が低い. それに対し, 滞在未経験者は滞在経験者の2分の1しか用いていないがその正用率は高く, より確実な解答を返していることになる.

滞在経験者と未経験者とのその他の多くの面での比較に対しては紙数が限られるのでここでは具体的な図表の提示は行わないが, 上述の分析が共通する. 次にその共通する困難点の2, 3を指摘する.

d 縮約形の例

韓国語は省略や縮約がしばしば行われる言語である. そして元の形(=原形)と縮約形とが機

能的あるいは意味的に同じものとして止らず、異なりをもつものになる例がある。

例：^{**}ka tʃi ta (もつ)→ka^t ta (もつ)

独立形で用いられる場合は、原形・縮約形ともに少しばかりの片寄りはあるが、「(具体的に手に・財産等を・うらみを)もつ」の意で用いられる。

ところが、ka tʃi ta が -ko 形で補助的に用いられる場合、例えば

he ka tʃi ko ～して、それでもって

tʃa tʃa ka tʃi ko 探して、それでもって

の形で用いられて、ka tʃi ko は日本語の「～でもって」といった「軽い根拠・理由・原因」の表現に用いられている。

解答の中には、こうした補助的な機能に働く ka tʃi ko の位置に縮約形 ka^t ta の -ko 形を用いている例がみられる。この場合、ka^t ko は決して用いられない。

このように、原形と縮約形が同じ重さで用いられるものではないことが的確に把握されていない。他にも原形より縮約形が日常的に用いられる例が多く認められるが、学生たちはこの重さの違いに対し無頓着である。

e 尊敬語の例

韓国語の敬語体系は「絶対敬語」といわれるものであり、日本語のそれは「相対敬語」といわれる。しかし両言語とも両方の性格をもつともいえる。そのため大まかに比較すれば、同じ性格をもつ。しかし実際の発話になると、表現上の個々の点に韓国語と日本語の違いが浮かび上がる。

ここでは助詞と接尾辞について言及する。

韓国語には助詞に尊敬の形がある。

例：sonseŋnim ʔkeso 先生におかれては

この ʔke so は主格助詞 i (ka) (が) に対する尊敬語である。

例：omɔnim ʔke お母さまへ

ʔke は、eke (へ・に対し) の尊敬形である。

日本語では助詞の部分に敬語の形を用いない。そのため学生たちは尊敬形を用い難い。

次に顕著な例は、-nim (一さん、さま) の脱落である。nim は人物をあらわす名詞について絶対的な尊敬を表現する。sonseŋ (先生), satʃaŋ (社長), kjotʃaŋ (校長) といったことばは通例 nim をつけて用いる。

日本語では、

先生が、社長(さん)が、校長(先生)が

と特に名詞を尊敬形にすることなしに用いる。そのため nim が脱落したままの表現を用いやすい。これは「誤り」ときめつけることはできないが、聞く者に非常に耳障りである。

f 接続詞の例

一つの基本形から派生した種々の接続詞がある。例えば kirɔhata (そうである) から派生し、

使用頻度の高いものをあげれば次のようなものがある。

例：	{ kireso•kire	(それで)
	{ kiriko	(そして)
A：	{ kiron-te	(ところで)
	{ kironi?ka•kironi	(だから)
	{ kiromjon	(それでは)
B：	kirona	(しかし)

これらの形は kirohata に種々の接続語尾をつけ加えることによって得られた接続形であって、それが固定化して接続詞とみなされるようになった形である。

学生たちの作文（発話）を観察すると、Aグループに属するものの相互間での混同がはげしい。これは、学生たちが接続語尾の理解に徹していないことも同時に語っている。

以上、誤用例のいくつかを指摘してきた。誤用に関する限り、滞在経験者も未経験者も共通した箇所に困難をもっており、その困難の程度にもそう差異があるとはいえない。

結 び

以上に分析し考察してきたことをここで再度まとめ、今後に残された課題について考えてみたい。

1982年度に筆者が担当した大阪外国語大学朝鮮語学科第4学年のLLクラスは総数12名の履習者のうち、5名の者がその第3年次に3ヶ月間から1年間に亘る韓国滞在（留学）の経験をもつ者であった。このような短期間の滞在（留学）が学習者に与える影響がどんなものであるのか。特に筆者が担当した科目（LLクラス）で目標とする「①見て、聞いて、理解する。②話し、書く」点にどのような影響を与えたのか。

受講者12名中5名の者が滞在経験者であり、未経験者中の2名の者は分析資料としたテストを不規則にしか受けなかった。そのため、資料は滞在経験者と未経験者のものが5：5と丁度50%づつを占める構成となった。このような構成になることは非常に稀なことである。恐らく、他の言語にあってはこのような状況を得ることは困難であろう。韓国留学がこれほど手軽になった今日の状況がこれを可能にしたものと思われる。この稀な状況をとらえて、滞在（留学）経験者と未経験者の差異を明らかにする機会とした。そして学年末テストの結果を分析資料とし次の結論を得た。

- ① 見たり聞いたりすることによる内容理解（率）に対しては、滞在（留学）経験者が未経験者を凌いでいる。これは「聞く」という行為の訓練の絶対的な量の違いによること、また経験者は韓国社会の現状を実際に体験し、知ることにより内容の理解が容易になったことも物語っている。
- ② 自由作文の形式による解答は表現における誤用のあり所をはっきりと見せてくれた。①母

音 e と ε ②子音 η と n ③接続語尾 ko と o/a/jo(so) の3点の検証例における正用率の滞在経験者と未経験者の比較は興味ある事実を映し出している。

正用率においては滞在経験者と未経験者の差がほとんどなく、ある検証例においては未経験者の方が高いものも認められる。滞在経験者は「表現したいこと＝話したいこと」は山積みしており、そのために多種で多量の表現を行うのであるが、その表現に正確さを欠くことになる。これに対し、未経験者は解答に必要な最小限の表現を手もちの知識内で手堅く行っている。

以上が学年末テストの分析資料に基づき指摘できる顕著な点である。次に滞在経験者5名と未経験者7名が授業の進行の中でどのような特徴を示し、また相互に作用しあったかにつき言及しておこう。

- ① 「聞く」ことに対しては滞在経験者の方が勝っていた。日常的な表現形式への慣れ、放送に用いられる表現への慣れ等がそれを支えている。滞在未経験者は「慣れ」ということに対し常に遠い位置にあった。
- ② VTR を「見て」同時に解説を「聞く」という二重の行為は経験者にはできたが、未経験者たちは先ず一回目は映像を「見て」、二回目に「聞く」のが精一杯であり、三回目になって何んとか「見る」と「聞く」が同時に行えるようになる。そのため、年度の始めの時期には数回以上反復して VTR を見せる必要があった。
- ③ 「聞く」ことによる理解・「見ながら聞く」ことによる理解ともに両グループにおいて、先ず日本語に置き換えて内容理解が行われ、解答という行為は理解内容を再び韓国語で表現し直すという過程を追っている。この韓国語（聞く）→日本語（理解）→韓国語（話す・書く）というパターンは、この一年間を通じて崩すことはできなかった。それはこの論文の分析データが明らかに語っている。
- ④ 半分近くを占める滞在経験者がクラスを圧倒するような印象を未経験者たちがもった時期が年度の始めの頃にあった。それは「話す」という行為において経験者の優位が明らかに認められたためである。しかし未経験者は経験者たちの多量の誤用に対してそれを評価する力を持たず、ただその多種で多量の発話に圧倒されたのである。年度も半ばを過ぎるとこうした雰囲気は徐々に落ち着きを見せたが、一年間を通じて経験者のグループは活発に発言し、未経験者のグループは比較的的口数が少ないという傾向は変わりがなかった。
- ⑤ 授業が筆者の観点からのみの説明に終らず、滞在経験者の日本人の立場からの意見、また未経験者の立場からの意見とさまざまな観点からの意見が出された。そのため相互に刺激し合う形で授業が盛り上がりを見せることが多かった。

以上、誤用の検証例の数量的な分析に加えて、クラスにおける一年間の学習過程の観察を通して韓国滞在経験者と未経験者の学習成果の比較を試みた。この分析と観察から短期間（1年間以下）の海外留学に

- ① どのような成果が期待できるのか。
- ② 留学に最大の効果をもたらすためにどのような準備が必要であるのか。
- ③ 留学で得た成果をどのように伸ばして行くのか。

という3点が考えられなければならない。

筆者はこれらの点に対し、次のように考える。

- ① 最大の成果は「聞くこと」に慣れたことと「話すこと」に積極的になったこと。
- ② 「話すこと」に積極的になり、「発話したいこと」は多量にある。しかしそれを正しい表現形式で表わせない欠点が残った。滞在未経験者との比較で、未経験者が手堅く手もちの表現形式に乗せて発話しているのを見ると、出発前に得る基礎の確実さが強く求められる。
- ③ 「聞く力」と「話す力」を得たことになるが、「話す力」が「話そう」・「話したい」という意欲に漲ってはいるが「正確な表現」にまでは達していない。滞在中に得た多種多量の情報を整理して自分のものにし、正確な表現形式に乗せる作業が今後彼らに残された課題となるであろう。

最近、韓国と日本の間の人的な交流が盛んになった。留学経験者と未経験者とが半々に近い割合を占めるクラス構成ができたのもこの事実を物語っている。この論文では「言語表現」に関する問題のみを扱ったが、留学（滞在）にはその他の社会的な問題も多く含まれる。留学生たちがそうした社会的な面にも深い関心を持ち、言語のみに片寄った関心で終わらないことを願うものである。

* ここでは特に「内容は何か」を問題としているのではないので、内容の記述は省略した。

** ハングル文字での表現が印刷の都合上無理とされたので音韻（音素）記号で表わした。

*** 終りに朝鮮語研究室の先生方の御協力に深く謝意を表す次第である。